

宮 治 誠

この度第21期日本菌学会会長に再選されました。会員の皆様の御支持を心より感謝すると共にその責任の重さに身が引き締まる思いをしております。第20期会長として過去2年間を振り返ってみますと、文字通り試行錯誤の連続でした。幸いにも皆様方の熱心な御協力によりなんとか多くの難局を乗り切って会を運営していくことができました。この紙面を借り、心より御礼申し上げます。

平成5年4月、第20期日本菌学会会長に就任した時ぜひやらなければならない懸案事項が少なからず存在していました。1つは英文誌の発行、2つ目は国際化を脱んでの国際シンポジウムの開催、3つ目は65才定年制を含んだ規約改正、4つ目は長い間懸案の菌学用語集の出版、そしてもし可能ならば古くなった住所録の改版でした。幸いにも皆様の御協力により用語集発行の件を除いては目的を達成することができました。特に英文誌 *Mycoscience* の発行は畑井編集委員長をはじめとする編集委員の方々の獅子奮迅の御努力によって成し遂げられたことを特記し、心より感謝する次第です。

日本菌学会第2回国際シンポジウムも昨年12月2～3日の2日間大瀧保教授を会長として仙台で開催されました。この国際シンポジウムは毎年続けていくことが重要であり、特に第2回はこのシンポジウムを定着させていく上で最も大切な時期でありました。大瀧先生をはじめとする関係した方々の御努力に深く感謝する次第です。

会長として過去2年間の感想は年々会員の活動が活発化してきたことを身に沁みて感じられたことです。特に多くの若手研究者や他の分野からの研究者が菌学会に入会し、積極的に活動しているのを見るにつけ、菌学会の発展を確信している人は私1人ではないでしょう。

これからの2年間何を成すべきか、と自問自答してみますと私の会長としての役割は以下の4項目を遂行することにあると思われれます。1つは *Mycoscience* を充実させ名実共に国際誌として定着させることです。その為には会員の皆様の御協力なくしてはできません。特に皆様のすぐれた原稿を期待しております。

次は和文誌「日本菌学会会報」の充実です。従来の伝統を引き継ぎ、格調高いジャーナルにするつもりです。*Mycoscience* と共に西村編集委員長をはじめとする編集委員の方々に切に御願ひする次第です。

3つ目は国際シンポジウムを定着させることです。日本菌学会の国際化、特に *Mycoscience* の充実^{のうえ}はこのシンポジウムにかかっております。毎年世界の著名な菌学研究者を5名前後招待し、身近で十分議論できる機会は特に若い研究者にとって掛け替えのない経験となる



日本菌学会会長 宮 治 誠
(平成7年度～8年度)

でしょう。考えてみて下さい。このシンポジウムを10年間続けると、世界各地からの著名な50名以上の菌学研究者と親しく交流することができ、その効果は測り知れません。とにかくこのシンポジウムを成功させる為、多くの会員の皆様がシンポジウムに参加して下さいを切に切に御願ひ申し上げます。*Mycoscience* とこのシンポジウムの充実^{のうえ}は日本菌学会の国際的発展に不可欠なことなのです。幸い昨年カナダのバンクーバーで開催された第5回 IMC 総会において杉山純多先生が IMA councilor に、私が IMA アジア地区副会長に就任しました。今後微研連委員の西村理事とも協力し、日本菌学会の国際化に努めるつもりです。

最後になりましたが私の任期中に成さねばならぬ重要事項の1つに菌学用語集の出版があります。この用語集の出版には20年以上編集が続けられておりましたが杉山編集委員長を中心とする用語集編集委員会の御尽力により、平成7年3月31日までにほぼその作業が終り、出版できる体制が整ってきました。その為平成7年3月末をもって用語集編集委員会を解散し、4月1日付で用語集出版委員会に切り替え、私が委員長となり、理事会メンバーを委員として出版に向け努力することになりました。現在どのような形で出版できるのか決っておりませんが、とにかく今までの努力を活字にして残したいと思っております。

私の未熟さの為会員の皆様には色々御不満があらうかと存じますが、全力を挙げ菌学会の発展の為努力するつもりですので御容赦の程御願ひ申し上げます。